

京都市中に現存する能の舞台の造形 (2)

横 山 勉*

A study of the formative elements of existing Noh stages in Kyoto city (2)

Tsutomu Yokoyama

Kyoto is a cultural city and has the traditional environment which has supported the Noh among the citizens. As well as being magnificent Noh stages modeled the Noh stage of the Edo castle there are also small-scale Noh stages that dedicate the Noh to the shrine up to now in Kyoto city. The purpose of this thesis is to clarify through the survey the characteristics of Noh stages of the Gokougu Shrine, the Okazaki Shrine, and the Awata Shrine, which have own Noh stages outside.

1. はじめに

京都は、能の大成者である世阿弥と深い関わりをもち、在京の家元や謡い、囃子、舞を嗜む多くの文化人を輩出した、室町時代以来の伝統の土地柄である。能を演ずる専用の建築である能舞台は曾て公家（御所）¹⁾、武家（二条城）²⁾にもあった。また、その演能を支えるために専門家の多くが京都市中に住んで奉仕した³⁾。能の舞台は、大社（伏見稻荷大社など）、大寺（西本願寺など）をはじめ、社殿規模が大きくない京都市中の社寺⁴⁾にも数多く残されている。能舞台はひとつの様式を有する建築であり、簡素な造形ではあるが、その中に優美さや華やかさを留めているものも多く見受けられる。現在、家元関係の屋内の専用能舞台で能が催される一方で、神社の屋外における能の舞台で多くの能楽社中の方々によって定期的に能が奉納がされ、広く一般市民に能楽の理解の機会を提供し、効果の期待できる芸術活動が行われている。京都は能を伝統芸術として身近に捉え、能を支えてきた環境をもつ文化都市である。

京都市中には江戸城本丸表能舞台に規範をもつ能舞台とともに、間口・奥行とも小振りの能の舞台が存在し、事情により演能を中止している舞台もあるが、奉納能を毎年続けている神社も多くある。その演能の歴史の一端を奉納絵馬や神社記録に留められており、生活芸術の伝統を垣間見ることができる。

今回は前稿の続報であり、京都市中において屋外に能の舞台をもつ御香宮、岡崎神社、栗田神社の3社殿を対象に、その能の舞台の実測調査を中心として、その造形概要を述べるものである。

* 建設工学科 建築学専攻

2. 御香宮

歴史的に皇族と縁の深い桃山丘陵は東山連峰の南端にあり、そこから西側へ斜面となって低地がひろがっている。伏見が歴史都市として発展するのは16世紀末の豊臣秀吉が伏見城を築いた後である。当時、伏見城の鬼門鎮護として御香宮が大亀谷へ移されたが、徳川家康により慶長10年(1605)現在の地に復旧された⁵⁾。御香宮は曾て周辺に大名屋敷が軒を連ねていた伏見区御香宮門前町にあり、幕末には伏見の戦い時に薩摩、幕府が対峙した場所でもある。御香宮の社殿は伏見桃山御陵へのびる東西道の大手筋に面して北側にある。表門より拝殿、本殿へと参道が一直線にのび、社殿は伏見の市街地にありながら、深い木々に囲まれた静寂な空間に佇んでいる。本殿への軸線と平行する南北軸上に社務所と対面して能の舞台はある。舞台の西側に見所、東側に拝殿があり、その観能空間は諸社殿に囲まれて静穏な世界を形成している。

世阿弥が京都で能を大成する室町時代に、御香宮において「矢田」「榎並」「未満寺」などの猿楽座が、その時々都合によって代わりながら能を奉納していた⁶⁾。御香宮の祭礼時に猿楽や相撲などの芸能が盛んに催された様子を「看聞日記」⁷⁾に見ることができる。古くから芸能の盛んな地方と言われ、纏った記述が残っている「看聞日記」より現在まで約600年の歴史があり、その伝統を受け継ぎ、御香宮では毎年9月の祭礼時に能が奉納されている。

現在の能の舞台は明治11年(1878)に再建⁸⁾されたものである。九社殿の北側三間を改築して能の舞台としたもので、本来は能を奉納する目的の建物ではなかった。社殿の記録⁹⁾によると、文化8年(1811)頃に舞台の新築が計画されたが、京都所司代より許可されなかった。文化11年(1814)の奉納時に仮設として、拝殿の南側に参道を横切るように舞台、橋掛り、鏡の間が設えられた様子が絵図として残されている。その後、昭和10年(1935)に舞台の補修、鏡の間、橋掛り、見所が新築された¹⁰⁾。御香宮の能の隆盛は能好きの豊臣秀吉が築いた城下町であったことと無縁ではなく、また、元来、芸能が盛んに行われた南山城地方ということもあり、明治11年(1878)には早くも和楽社が興され、御香宮の能の舞台の復興へと繋がり、同年の再興の舞台開きでは明治時代の近代能楽界を指導した、片山晋三、金剛謹之輔の二人の能楽師が能を奉納している¹¹⁾。また、二人は京都に本拠を構えて能の文化都市での能楽の隆盛に奔走した能楽師でもある。現在の御香宮神能会が神能奉納を受け継いだ昭和49年(1974)の第1回御香宮神能に金剛流宗家が演能を勤め、その後、節目の折りには能を奉納するなど、御香宮と金剛流との関係の深さを示している。

舞台は本殿・拝殿の軸線と外れて、社務所(北側)、拝殿(東側)、見所(西側)と諸社殿に囲まれた奥まった位置に北向きに建っている。能の舞台を中心とした建築群による構成は、本殿と対向した配置の奉納能の空間構成と異なり、演能と観能の空間が一体となった高密度な芸能空間を創出している。

舞台は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、銅板葺きで、舞台と連続して後方に後座、後座の鏡板を隔てて南隣に畳敷きの楽屋があり、切戸口で連絡している。本来桁行六間、梁間三間の入母屋造である九社殿を舞台部と楽屋部に区切り、舞台部は能の舞台としての機能をもつように改築されている。後座は桁行一間、梁間一間で、天井の形式や床板の貼り方で空間の質を変えているが、

本舞台と連続した一体空間となっている。舞台の東側に一間隔てて瓦葺切妻の見所があり、その間に高欄付きの脇座を設けて舞台に付属させている。脇座は漆喰仕上げの下がり壁によって空間分節を示しながら舞台と連続した空間を確保している。脇座のある空間と見所は六葉釘隠付き長押の意匠によって連続した建築構成を創出している。橋掛りは桁行二間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺で、虹梁は下端に眉が施され、簡素ながら優美さを放っている。橋掛りに施された高欄は脇座のそれと同意匠で統一された形姿であるが、高欄の地覆によって能楽師の足元が隠れ、演能における足元の動きに表現される緊張感が伝わりにくくなる恐れがある。舞台と68度の角度をもつ橋掛りは入母屋造、瓦葺の鏡の間に繋がっている。鏡の間は橋掛りの裏廊下で楽屋と連絡している。鏡の間と橋掛りは棹縁平天井で、外壁には採光のために無双窓が取り付けられ、腰壁の板貼り以外は漆喰仕上げとなっている。

床板は西本願寺奥能舞台（国宝）や表能舞台（重要文化財）と同様に舞台と脇座は正面に向って、後座はそれと直交する方向に、橋掛りは長手方向に貼られている。床板の厚みは9分である。舞台の天井は棹縁平天井で道成寺の演目に対応できるように中央部の一部を高く舟底天井とし、後座は15度の傾斜角をもつ片流化粧屋根裏天井となっている。鏡板には田口忠臣の落款がある老松の能画が描かれている。一般的に老松は舞台の背後に生えているかのように大地に近い根元の部分は省かれて描かれるが、御香宮の鏡板には左右の水平方向へ伸びる老松が大地とともに描かれており豪壮な形姿ながら異なる風趣を呈している。脇画は若竹や金泥によるとみられる剥落した部分にやまと絵系の手法がみてとれ、柔らかな画風の能画となっている。

柱頭組物は舞台、橋掛りとも舟肘木である。水引梁上に肘木付き束が二つ施され、その壁は漆喰仕上げとなっている。妻飾りとして木連格子、六葉釘隠の梅鉢懸魚が施されているのみで、破風に飾り金物はなく、全体として簡素な造形である。

3. 岡崎神社

岡崎神社のある東山山麓の地は、白川の下流域である山紫水明の地域として平安時代より貴族の別業が営まれた景勝の地であり、中世都市京都の成立と近代都市京都の再生にかかわる二度の激しい景観の変化を経た京都の文化ゾーンの一郭である¹²⁾。前者は白河天皇の法勝寺創建にはじまる大規模建築物の建設であり、後者は平安遷都二千百年記念の平安神宮創建をはじめ周辺文化施設建設である。その平安神宮の東方、黒谷の南、丸太町通りに面して社殿はある。平安遷都（794年）時の鎮護ために四方に祀られた一社であり、東天王社と称した¹³⁾。古くから岡崎一帯の産土神として崇敬を集め、安産、方除け、厄除けの神として信仰がある。

丸太町通りに面する鳥居から参道が一直線にのび、拝殿、本殿へと至る途中に、拝殿の手前西側に小振りで形姿の端正な能の舞台が東向きに建っている。丸太町通りより参道を進んだ先に境内が拡がり、そこに能の舞台があるため、拝殿前の石段下にあたる観能空間は市中にありながら静寂な場を確保している。毎年8月23日には能の奉納があり、平成15年（2003）は金剛流社中による袴能や舞囃子が奉納された。舞台正面と脇正面が主な観能空間である。正面を除いて舞台周辺は多人

数を収容する観能空間ではなく、小振りな舞台に相応しい観能のスペースである。

舞台完成は京都府への竣功届¹⁴⁾によると昭和4年(1929)8月15日となっている。主な建築材料は台檜、米松、杉などであり、舞台柱は台檜、床拭き板、鏡板も台檜である。能舞台周辺の深い緑の影響もあるが、経年変化による台檜の材質特性の黒ずみによって生ずる建築の色彩における低彩度・低明度が建築物全体を小規模ながら堂々とした形姿としている。

舞台は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、銅板葺(桧皮葺改築)で、飾金物が取り付けられていない高欄をもつ張り出しの脇座がある。脇座の奥に貴人口があり、その上に竹の節欄間が施されている。床は無目敷居によって本舞台、脇座、後座に区切られ、本舞台の床板は正面へ向って、脇座、後座の床板は本舞台へ向って貼られている。橋掛りの床板は短辺方向へ貼られ、現存する能舞台の多くは長辺方向へ貼られる施工とは異なっている。舞台と84度の角度をなす橋掛りは桁行三間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺である。橋掛りは鏡の間(控室)と隣接し、鏡の間より橋掛り・舞台の背後に続く伝い廊下によって舞台の切戸口へと連絡している。舞台と後座の化粧屋根裏天井による舟底と片流の構成は音響効果を考慮したものであり、舟底、片流天井の傾斜はそれぞれ20度、15度である。舞台床下には音響効果と深い関係にある瓶は入っていない。

舞台の鏡板に描かれた老松と脇壁面の若竹の能画は、琳派の継承、近代デザインの先駆者と評された神坂雪佳¹⁵⁾(1866~1942)によるものである。老松の能画は枝葉が多く描かれ、江戸城本丸表能舞台の鏡板に描かれた様式化した老松とは異なり、典雅な風趣を漂わせている。脇の若竹は枝葉などが丹念に描かれている。装飾の要素が少ない舞台の中で鏡板の能画が華やかさを演出している。

柱頭組物は舞台のみで、舟肘木で構成され、釘隠などの飾り金物は用いられていない。舞台の虹梁は下部に眉をとるのみで、装飾は施されず、橋掛りは舞台と直角に取付いている。水引梁上の板墓股が間口・桁行ともひとつずつあり、彫刻図案は渦形であり律動感のある造形である。同様の意匠が化粧棟木の東部にも用いられている。舞台妻飾として豕扱首、破風に飾り金具はなく、六葉釘隠付きの猪の目懸魚が施されている。二軒で屋根の軒が深く、優美で端正な形姿を示している。橋掛りの背後の壁は漆喰仕上げとなっており、壁面による圧迫感を和らげ、瓦葺の重々しさを軽減するように典雅で軽やかな空間を創出している。

4. 栗田神社

東海道の要害である栗田口には格式の高い門跡寺院の青蓮院があり、栗田神社はその北東、華頂山の中腹にあり、青蓮院の鎮守社として崇敬されてきた。この一帯は多くの刀鍛冶や陶工が住んでいた所でもある。古くから栗田天王と称し、八坂神社と同じ神を祀るところから、感神院新宮とも呼ばれたこともあった¹⁶⁾。三条通りに面して石造の一の鳥居があり、華頂山に向って参道がまっすぐのびている。参道を登り詰めた高台に社殿はあり、その南西に社務所に隣接して能の舞台はある。能の舞台の正面は本殿、拝殿を通る軸線と少し南側へずれ、本殿と向い合っている。舞台の建立年代は定かではないが、鏡板の能画に大正8年(1919)の落款があり、少なくともそれ以前に竣工したものと考えられる。この能の舞台は伏見稻荷大社にあったものを丸太町堀川の商人を経て現

在地に大正3年(1914)移されたもの¹⁷⁾とされているが確証はない。参拝の動線と混交しない舞台正面が主な観能空間であり、舞台は東向きで神社敷地の奥まった位置にある。

舞台は桁行一間、梁間一間、一重、唐破風造、銅板葺で、高欄をもつ張り出しの脇座がある。脇座は片流の庇屋根が付いている。現存する舞台では珍しく唐破風屋根で、堂々した風格の中に華やかさを漂わせている。橋掛りは昭和54年(1979)の火災で一部消失しており、また礎石の痕跡も確認できず、橋掛りの全体長はわからないが、梁間一間、一重、瓦葺である。橋掛りは手前のみ高欄が付き、背後は板壁で横蓮子窓が上方に施されている。橋掛りと舞台は90度で繋がっている。本舞台の床板は正面へ向って貼られており、脇座は本舞台と同方向、後座と橋掛りは本舞台と直交方向へ貼られている。本舞台は格天井、後座は18度の傾斜角をもつ片流化粧屋根裏天井、橋掛りは疎ら垂木の化粧屋根裏天井である。

舞台の鏡板の老松は大正8年(1919)に神坂雪佳(1866~1942)によって描かれたものである。老松の幹は右下より左上へ向ってうねるようにのび、枝葉は大振りに表現されている。鏡板の画面の規模が大きいいため、老松の能画がより一層迫力あるものと映る。落款が記された脇能画には若竹が水平材の貫を貫くように描かれている。脇座の後方に意匠としての貴人口があり、その上には竹の節欄間が施されている。柱頭組物は舞台のみで三ッ斗組により構成され、実肘木で支えられた水平材の木鼻に繰型が施されている。水引梁上に渦型の藝股がひとつずつ施されている。能の舞台は妻飾として唐破風屋根の破風板に粟田神社の紋所(八坂神社と同様)である三つ巴紋と唐花木瓜紋を配した飾り金物や猪の目懸魚形式に花卉が彫刻された兎の毛通があり、渦の繰り形のある妻梁上には両脇に精巧な花卉の彫刻を添えられた笈形があり、華やかさを演出している。唐破風屋根の反り部分の造形が二軒の連続した垂木傾斜の形姿に表れている。「この舞台は、能にはちょっと狭く、狂言をやるのに打ってつけた」¹⁸⁾と茂山忠三郎氏の言葉よりうかがえるようにこの舞台は小振りである。茂山千五郎社中の奉納狂言が昭和15年(1940)に行われ、その洛中百社奉納¹⁹⁾が絵馬堂に残されている。

5. 寸法にみる能の舞台の造形

舞台の間口と奥行(図-1)

能舞台の完成期の代表例として万延元年(1860)の江戸城本丸表舞台²⁰⁾があり、絵図でその様子確かめることができる。現存の最古といわれる西本願寺奥能舞台²¹⁾の間口は江戸城本丸表能舞台より僅かに狭く奥行はほぼ同じである。御香宮の舞台の間口・奥行は江戸城本丸表能舞台とほぼ同じである。岡崎神社と粟田神社の本舞台の間口・奥行はほぼ同じの13尺前後で江戸城本丸表能舞台より随分と小さく、禁中の紫宸殿前に設えられた本舞台²²⁾の方16尺より小さい。

舞台後座奥行と脇座の幅(図-1)

御香宮、岡崎神社、粟田神社の後座奥行はほぼ同じで、江戸城本丸表能舞台より小さい。脇座の幅に関しては調査対象三神社とも江戸城表能舞台とほぼ同じである。

舞台の間口内法と水引梁内法(図-2)

間口内法と水引梁内法の縦横比をみると、江戸城本丸表能舞台 1,77、西本願寺奥能舞台 1,67、西本願寺表能舞台²³⁾ 1,79、御香宮 2,08、岡崎神社 1,73、栗田神社 1,47 である。岡崎神社は江戸城本丸表能舞台とほぼ同じであるが、御香宮は水平方向への拡がりが増強された形態で、栗田神社は演能を縁取る開口面積は大きくなく垂直方向を意識させる縦横比となっている。

橋掛りの全長、幅（図一 3）と角度

御香宮、岡崎神社の橋掛り全長は江戸城本丸表能舞台の約五分の二、約七分の二である。橋掛りの幅は御香宮、岡崎神社、栗田神社のいずれも江戸城本丸表能舞台より僅かに小さい。江戸城本丸表能舞台の橋掛り全長は舞台間口の 2,7 倍であり、御香宮は 1,0 倍、岡崎神社は 1,2 倍である。御香宮の橋掛りと舞台の角度は西本願寺表能舞台とほぼ同じで、岡崎神社は 90 度に近い角度、栗田神社は 90 度である。最古の能舞台と言われている西本願寺奥能舞台は 60 度であり、いずれの舞台も浅いものとなっている。

6. まとめ

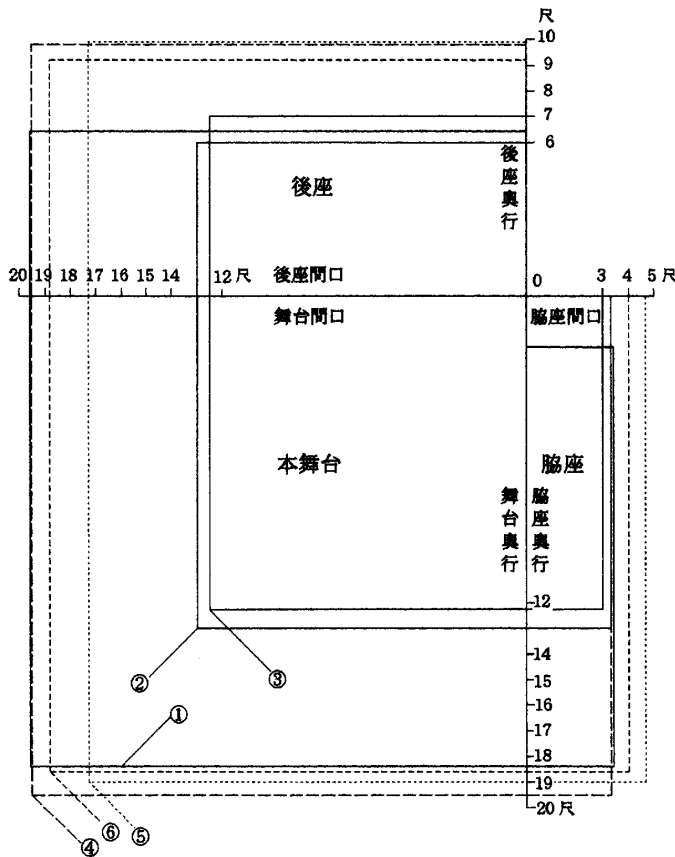
御香宮の能の舞台は九社殿を改築したもので様式化した能舞台とは僅かに異なる平面形式をもつが、その規模は江戸城表能舞台に近く、装飾は控えめで全体として簡素な造形である。江戸城本丸表能舞台を規範としたもの以外に、本舞台の間口・奥行を 13 尺前後の小振りの能の舞台として岡崎神社と栗田神社の舞台があり、それは狂言にとってほどよい規模と表現され、定期的に奉納能が演じられている。岡崎神社の能の舞台は簡素で端正な佇まいであるが、栗田神社の能の舞台は正面妻飾りとして唐破風屋根や墓股彫刻、飾り金物などに華やかな造形が創出され、様式化された能舞台と異なった風趣の建築表現がなされている。

謝辞 調査に際して、三木善則氏（御香宮）、本田芳道氏（岡崎神社）、佐々貴顕氏（栗田神社）に多大なご協力を戴きました。記して感謝申し上げます。

註

- 1) 藤岡通夫「京都御所」中央公論美術出版 1987
- 2) 寛永度二条城全図 内藤昌「愚子見記の研究」井上書院 1988
- 3) 新保泰介「金剛」81号 1971 p3
- 4) 竹村俊則「新撰京都名所圖會」白川書院 1963
- 5) 竹内理三「角川日本地名大辞典 26 京都府上巻」角川書店 1982 p602
- 6) 早稲田大学演劇博物館編「日本演劇史年表」八木書店 1998 p42~44
- 7) 京都市「史料京都の歴史第 16 巻」平凡社 1982 p378~380
- 8) 御香宮社務所「御香宮略記」
- 9) 三木善三「御香宮神社」1915
- 10) 8) に同じ
- 11) 9) に同じ 奉納能番組記載
- 12) 7) に同じ p98~100
- 13) 三浦譲「全国神社名鑑」全国神社名鑑刊行会 1977 p71、岡崎神社社務所「岡崎神社由緒略記」
- 14) 岡崎神社社務所「竣工届」1929

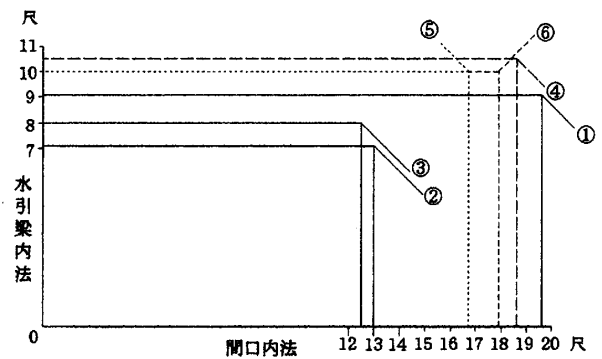
- 15) 榊原吉郎「神坂雪佳」京都書院 1981
 16) 7) に同じ p128~129、栗田神社社務所「栗田神社略記」
 17) 佐々貴氏(栗田神社) 話、井上頼寿「金剛」77号 1970 p20
 18) 17) に同じ
 19) 茂山千作「狂言 85 年茂山千作」淡交社 1984 p82
 20) 山崎榮堂「能舞台」『野上豊一郎編「能楽全書」第4巻』東京創元社 1979 p12~22
 21) 北尾春道「国宝能舞台」洪洋社 1942 p53~57
 22) 20) に同じ p32
 23) 21) に同じ p83~87



図一 1 能の舞台間口と奥行

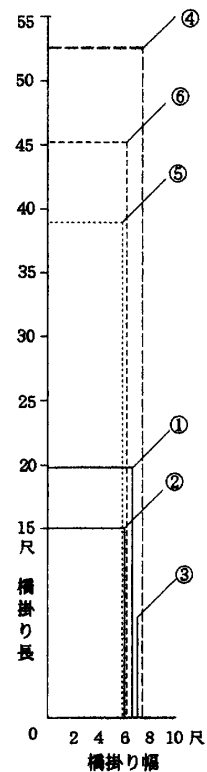
表一 1 能の舞台主要寸法 (単位: 尺)

	御香宮	岡崎神社	栗田神社
舞台間口	19,6	13,0	12,5
舞台奥行	18,4	13,0	12,3
後座奥行	6,4	6,0	7,0
脇座の幅	3,4	3,3	3,0
舞台床高	2,5	2,8	2,5
水引梁高	9,1	7,1	8,0
舞台柱太	0,66	0,64	0,73
橋掛け幅	6,5	6,0	7,0
橋掛け長	19,9	15,0	



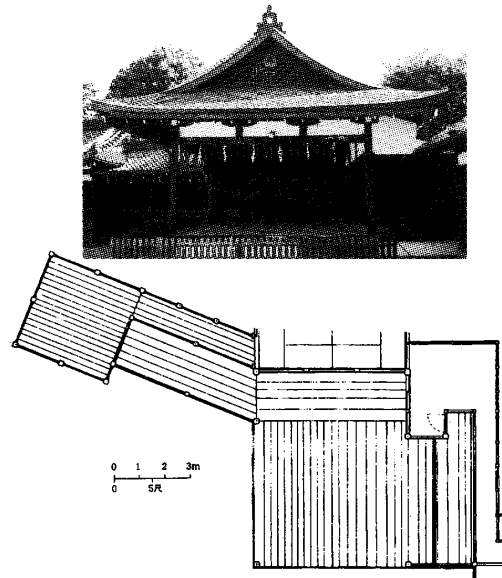
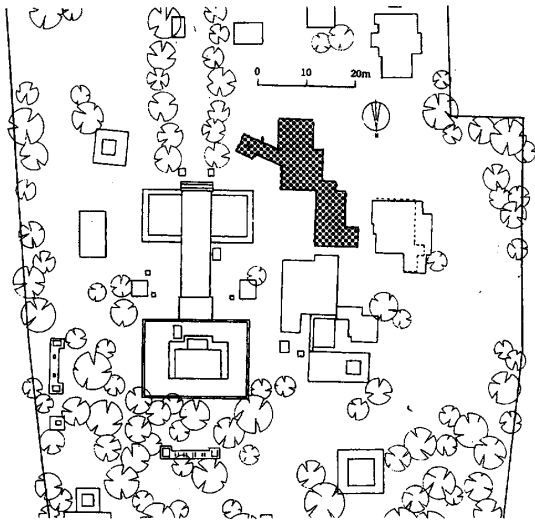
図一 2 能の舞台間口内法と水引梁内法

- 能の舞台
 ①御香宮
 ②岡崎神社
 ③栗田神社
 ④江戸城本丸表能舞台
 ⑤西本願寺奥能舞台
 ⑥西本願寺表能舞台

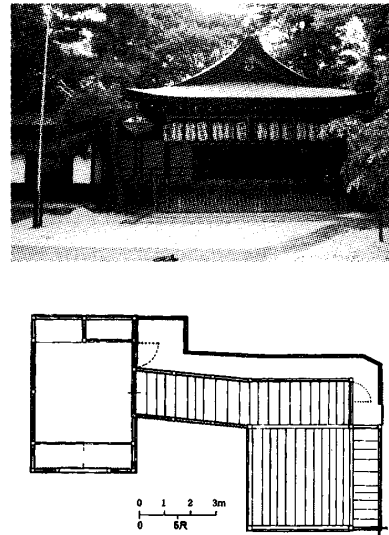
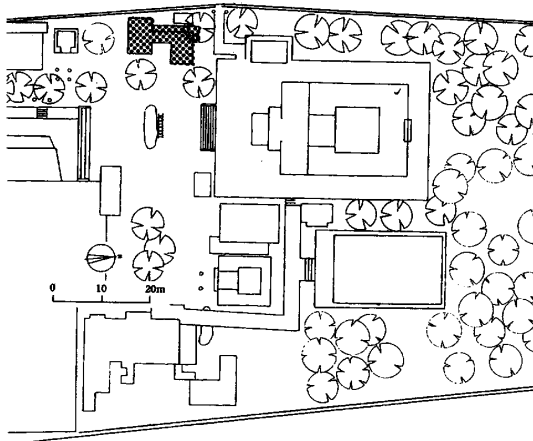


図一 3 橋掛け全長と幅

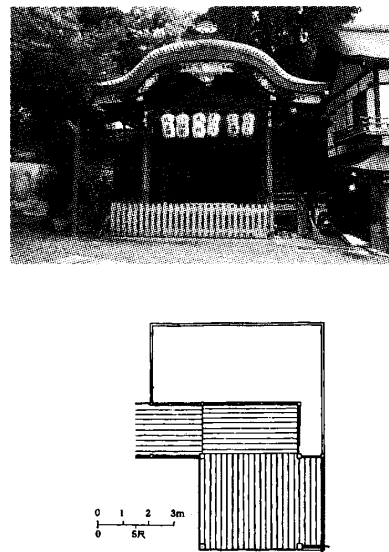
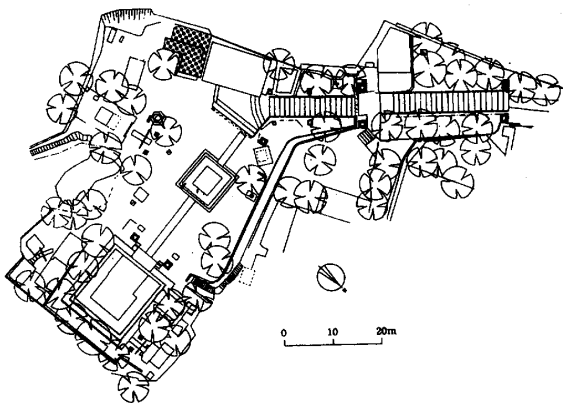
①御香宮 京都市伏見区桃山御香宮門前町



②岡崎神社 京都市左京区岡崎東天王町



③栗田神社 京都市東山区栗田口鍛冶町



図一4 能の舞台配置図・平面図

(平成15年12月5日受理)